

当面の技術対策（畜産編）

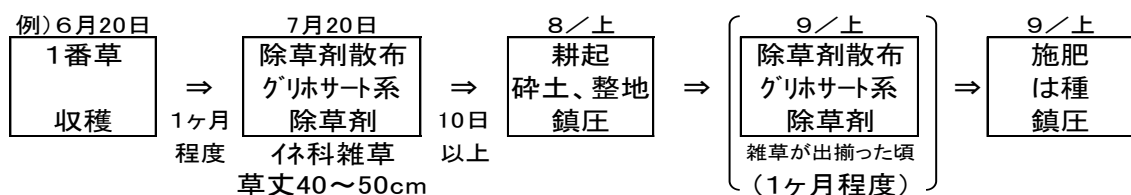
令和4年7月15日
発行：ゆとりみらい21農業推進協議会指導部会

牧草の夏更新に向けて

晩秋には種した新播草地は、越冬性が悪くなります。は種作業を9月上旬までに終わらせるよう、計画的に作業を進めましょう。

- (1) 更新後の牧草収量は、3年目をピークに徐々に低下します。これは草地を使いつづけると、草地の化学性（pH）、物理性（土壌硬度）が悪化するためであり、ただ施肥量を増やしても増収は期待できません。また、地下茎イネ科雑草（シバムギ等）が増加した場合も収量の低下が見られます。雑草および裸地が合わせて30%以上であれば更新を検討し、70%以上であれば除草剤を用いた完全更新を行いましょ。
- (2) シバムギ、リードカナリーグラスなどの地下茎イネ科雑草が多い場合は、1番草収穫後、イネ科雑草の草丈が40～50cm程度になった頃にグリホサート系除草剤を散布しましょう。草丈が短い状態での散布は、後発の再生芽により再びシバムギが増殖してくる恐れがあります。加えて、散布後の耕起作業（は種床造成）までは枯殺のため10日以上あけてください。
- (3) リードカナリーグラスが多い更新草地では、耕起・整地作業の1ヶ月後にグリホサート系除草剤を再散布することをおすすめします。再散布により、リードカナリーグラスの地下茎からの再生を防ぐことができます。

図. 更新のスケジュール



更新の判断・更新方法については、農協又は普及センターにご相談ください。